
バス停で

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バス停で

【Nコード】
N0459E

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
沖縄での話。紙子は放課後バス停に来るように言われ告白される。心ではそれを断ろうとするが。沖縄では芭蕉には魔力があるとも言われているそうです。

第一章

バス停で

沖縄のある村での話だ。もう三十年程前の話らしい。

日本によくやく復帰した。それでほっとしていた頃の話だ。ベトナムでの戦争も終わり殺伐とした雰囲気もようやく消えてはきていた。

何はともあれ平和になってきていた。それは沖縄全体に広がっていた。

そうした頃である。村でも平和な空気が漂っていた。

「兵隊さんもいなくなっただね」

「何とかって感じかね」

そんな話が畑のあちこちからも聞こえる。とりあえずは平和になったのである。

その平和の中に真喜志紙子もいた。沖縄の娘らしく日に焼けた肌に細長い顔をしていて目が丸く大きい。黒い長髪を後ろで一つに束ねている。服はいつもラフな姿で農家の娘であることをその格好から教えていた。そんな娘であつた。

活発な美貌の女の子だったので近寄って来る男の子は多かった。

その中には前から沖縄にいるこちらの言葉での所謂ウチナンチュだけではなく沖縄以外の日本人であるヤマトンチュやアメリカ軍人の子供達もいた。今回はそのアメリカ軍人の子供達であつた。黒人の背の高い少年だ。

「折角だけれど悪いね」

紙子にはこりと笑ってその黒人の少年の誘いを断るのだった。場所が村の駄菓子屋のすぐ前であつた。そこでか少年の誘いを受けていたのだ。

「断らせてもらうよ」

「何だよ、つれないな」

「最初からその気がないからはつきり言っておくのさ」

紙子の笑顔は明るいが言葉はきついものであった。

「悪いね、そういうことでね」

「わかったよ。僕も相手にその気がないならいいよ」

「あっさりしてるんだね」

「パパに言われてるんだ」

黒人の少年もにこりと笑って言葉を返す。彼もあっさりしたものであった。

「断られたらそれで諦めろってね」

「へえ、いいパパさんなんだね」

「アメリカ海軍のパイロットだよ」

少年の言葉に強いものが宿る。そこから彼にとって父というものが誇りであることがわかる。パイロットが誇らしいものであることは日本でもアメリカでも同じのようだ。

「そのパパの言葉ならね」

「そうなの」

「そうさ。じゃあね」

「ええ」

少年は潔く去った。紙子も彼もお互い手を振り合ってそれで別れる。この少年の他にも彼女に声をかける者は多かったし時には強引に言い寄ろうとする者もいたがそうした相手には拳で返したりもするのでかなり手強いと言えた。そんな彼女だったがある日のことだった。

「ねえ紙子」

まだ木造の古臭いと言ってもいい校舎の廊下でクラスメイトの女の子に不意に声をかけられた。時間は放課後、丁度下校中でのことだ。

「あんたに会いたい人がいるんだって」

「会いたい人？」

「これだけ言えばわかるわよね」

その娘は紙子に含み笑いを見せて今度はこう言ってきた。

「何なのか」

「何となくね。わかったわ」

またかと心の中で思ったがそれは笑顔の下に隠した。そうして言葉を返すのだった。

「そういつことなのね」

「そういつこと。それで場所はね」

「何処？」

「バス停のところだって」

「ああ、あそこね」

バス停と言われてすぐに何処かわかった。芭蕉が一面に繁っているその場所だ。そこから紙子のいる高校まですぐなのだ。それで通学路に使われているのである。

「あそこにいるからって」

「ふうん。それで誰なの？」

「さあ」

今度の返事は実につれないものであった。娘も言葉をはぐらかして笑っただけだった。

「誰かまではわからないのよ」

「そうなの」

「そういつこと。それでもね」

娘は言葉を続けてはきた。

「待ってるからって」

「一人で？」

「何ならついて行こうかしら」

「それはいいわよ」

右手をあげて横に振ってそれは断る。仕草がヤマトンチュのものに似てきているのはテレビのせいであろうか。復帰後の特徴の一つでもあった。

「何人かで強引に来たら急所蹴り飛ばしまくって逃げるから」

「随分強引ね」

「そういう奴がいなくても限らないしね」

今度は腕を組んでの言葉だった。そうした覚悟はいつもしているらしい。女の子として。

「女の必要条件よ」

「まあ強いに越したことはないけれどね」

「そういうことよ。さて」

ここまで言っただうでまた言う紙子だった。

「じゃあ今から行つて来るわ」

「今からなの」

「ええ。相手はもう待つてるんでしょ」

「多分ね」

少し考える目になって紙子に答えてきた。

「今さっき伝言頼まれたし」

「伝言なの」

「そつ、あんたに伝えてねつて」

彼女は軽い調子で言ってきた。

「今さっき頼まれたのよ」

「誰からなの？」

「ええと。誰だったっけ」

また随分といい加減な話だった。しかし首を傾げて考える顔になつているところを見ると本当にわからないらしい。それが顔にも仕草にも出ていた。

「見たことのない娘だったわ」

「見たことのないって」

「一年生なのよ」

こう言ってきた。なお紙子達は二年である。制服につけている組章の色でわかるようになっていいるのだ。三年が青、紙子達二年が緑、そして一年が赤なのだ。

「だから知らないのよ」

「じゃあ相手は」

「よっ、年下キラー」

笑顔になって紙子を茶化してきた。今度は軽い感じだった。

第二章

「憎いわね」

「茶化さないでよ。とにかくバス停のところね」

「そういうこと。じゃあ頑張ってきてね」

「ええ。それにしても」

ここで紙子是不審に思うことがあった。それはバス停という場所についてだ。

バス停は通学路で多くの学生達が利用している。特にこの時間はそのだ。それで今会うとなると当然ながら多くの人間が周りにいるということになる。別に悪いことをするわけではないのはそれでわかるのだがそれでも告白する場所としてはかなり不自然である。紙子はそれについて思うのであった。

「どういづつもりかしら。まあいいわ」

しかしそれはいいとした。とりあえずであるが。

「相手がそこにいるのならね」

会っただけ会うことにしたのである。こう決めて学校を出てそのバス停に向かうと。そこには大勢の生徒達と一緒に見たことのない制服の男の子がいた。

随分と肌が白い。ブレザーのお洒落な制服と一緒にそれが目立つ。それだけではなく顔立ちも穏やかで整っている。中性的な顔立ちと言っていいものであった。髪型も紙子の学校に多いスポーツ刈りではない。お洒落な長い髪形であった。その少年が立っていたのだ。

「あつ、来てくれたんだ」

どうやら紙子のことはもう知っていたらしい。彼女の姿を認めてぱつと明るい笑顔になって声をあげてきた。

「真喜志紙子さんだよね」

「ええ」

紙子は男の子の言葉に対して頷いた。まずはその顔から表情を消

している。

「そうだけれど」

「よかった。来てくれたんだ」

紙子本人と聞いて安心したのだろうか。静かに笑って微笑んできた。

「本当によかったよ」

「よかったのはいいいけれど」

ほっとした微笑みを見せるその男の子に対して今度は自分から声をかけた。単刀直入に話を進めたかったのだ。相手が何を言うのかはわかっていたからだ。

「何の用なの、それで」

「あつ、そうだね」

彼女本人に言われて表情を変えた。頷く感じになっていた。

「実はね、真喜志さんに伝えたいことがあつて来てもらったんだ」

「そうなの」

（やっぱりね）

紙子はそれを聞いてやはりと思った。表情にそれは出さないがもうわかっていたのだ。しかしそれを聞いてもどうするべきかはまだ決めてはいなかった。

「それでね。実はね」

「ええ」

「よかつたらね。僕とさ」

これから聞く言葉はわかつている。不意に断ろうかと思った。実は彼女のタイプは頑健な筋肉質の大男なのだ。従って今日の前にいる彼はタイプではない。だからそれで断ろうとしたのだ。しかし。何故か急にその気持ちが変わった。他ならぬ彼女自身の心の中において。

（！？あれっ）

自分でもそれに気付く。違和感を感じている間にも相手の男の子の言葉は続く。

「一緒に色々な場所に行かないかな。どうかな」
「そうね」

自然に言葉が出た。自分でも驚く程度に。

「それもいいわね」

「いいんだ」

「ええ」

（どういうことよ）

顔では微笑んでいる。しかし心は全く逆であった。驚きを隠せず
に呆然とさえしている。どうしてこんなことを言っているのか自分
でもわかりかねているのである。

（ここでこんなことを言うなんて。断らないの!？）

「そういうことでね」

「よかった」

彼は紙子の言葉と顔だけを見てにこやかに笑っていた。ほっとし
たような安堵の息も漏らしている。本当に嬉しいことがその様子か
らはつきりとわかる。

「断られるんじゃないかって思ったけれど」

「そんなわけないじゃない」

（そんなわけないって）

また己の言葉に驚く。心とは全然別のものだったからだ。どうし
てそれが出続けるのか自分でもわからない。だが出てしまった言葉
は取り返しがつかないのだ。

（どうして。こんな）

「じゃあさ。早速だけれど」

「ええ」

言葉はさらに続く。

「一緒に。バスに乗って帰ろう」

「そうね。最初はそれね」

（最初じゃないわよ）

これもまた己の心とは別の言葉だ。だから戸惑いを隠せない。し

かしそれも顔にも言葉にも出ない。ただ心の中で驚いているだけである。

（このままだったら私この子と）

「僕の名前だけねどね」

「何ていうの？」

心とは完全に乖離してやり取りだけが続く。

「末永義巳っていうんだ」

「末永君ね」

「うん。真喜志さん」

「紙子でいいわよ」

この言葉もまた心とは別である。どうしても別の言葉になっている。

「気軽にね。だってこれから彼氏と彼女なんだし」

（どうしてもこんな言葉をまた）

「彼氏と彼女なんだ」

「だってそうでしょ？」

心とは別の言葉がまた出る。

「だからよ。それでいいじゃない」

「それでいいんだ」

「そうよ。義巳君」

相手に対しても気軽に名前を呼ぶ。既にそれなりに長く付き合っているかのように。

「行きましょう。バス停にね」

「うん。それじゃあ」

「これからもね」

（またこんな言葉を）

どうしても出てしまう言葉に戸惑いを感じずにはいられない。しかしその戸惑いは何時の間にか少しずつ消えていた。次第に馴染んできていた。

（それでも）

心の中の言葉にもそれが出る。

（いいかしら。見ればこの子だっていけてる感じだし優しそうだし）
そうしたことがわからない程馬鹿でもない。だからこつも思っ
た。

（いいわね。やっぱり）

割り切った。元々さばさばした性格だ。だから決めたのだった。

「バスが来たよ」

義巳が声をかけてきた。

「乗ろう」

「わかったわ。それじゃあ」

「いや、何ともさ」

「いいもの見させてもらったよ」

ここでそれまで黙っていた周りが二人に声をかけてきた。にこに
こと笑いながら。

第三章

「どうなるかと思ったけれどね」

「いい感じじゃない」

「そうね」

紙子の方でも笑いながら彼等に言葉を返した。

「まさかこんなことになるとは思わなかったけれどね」

（本当にね）

心の中で彼女だけが思っているこんなことと周りのそれは違う。

しかしそれがわかつているのは彼女だけだ。それは微妙な違いであった。だが完全な違いでもあった。

（どうしてかはわからないけれど）

思いながらちらりと見たのは芭蕉の葉であつた。その緑の大きな葉を。

（芭蕉……）

まさかと思つた。しかしここで。

バスが彼女達の目の前に来た。扉が開く。

「乗ろう」

それを見た義巳が紙子に声をかけてきた。

「今からね」

「うん。それじゃあ」

自分から義巳の手に自分の手を絡ませる。これも自然に出てしまつた。

「二人でね」

「乗りましょう」

こうして二人の交際がじまつた。それがどうしてかは紙子にはわからない。しかし。こうした話になっていくのであつた。不思議な方向に。

「あの芭蕉の場所で告白するとね」

「成功するらしいよ」

そうした話になるのであった。

「どういうわけかわからないけれどさ」

「絶対実るらしいわよ」

そういうことになった。紙子からはじまったのであるが皆それを信じて告白して恋を实らせていった。何時の間にかそれが伝説になるのだった。

それから三十年。今では。

バス停ではなくなりそれは別の場所に移っていたが。芭蕉はそのままだった。

そして彼等と彼女達も。今ではありとあらゆるカップルの告白の場になっている。皆そこで告白して恋を实らせていた。そしてそれを見ている二人のそろそろ初老になろうという男女がいた。

「ここだったよね」

「そうね」

見れば色白の男性と黒髪の細長い顔の女性だ。義巳と紙子である。

「ここで告白したわよね」

「そうだったね」

昔の面影をそのまま残した爽やかな顔で。義巳は妻の言葉に頷くのだった。

「あの時にね」

「あの時ね」

紙子は晴れやかな空の下にある芭蕉を見ながら夫に述べる。あの明るい笑顔ではなく穏やかで静かな大人の微笑みをその顔に見せている。

「実は私断るつもりだったのよ」

「そうだったんだ」

「ええ。けれど」

夫に対して語る。その笑顔のままで。

「断らなかったのよね」

「どうしてなの？」

「自然に言葉が出たのよ」

あの時のことをそのまま述べるのだった。三十年前の告白の時をだ。今でもはつきりと覚えている懐かしいがそれでいて昨日のことにも思えるあの日のことをだ。

「本当にね。自然にね」

「そうだったんだ」

「どうしてかはわからないわ。心とは裏腹に」

「言葉が出たの」

「最初は戸惑ったわ」

その時のことを正直に述べ続ける。懐かしむ顔と共に。

「自分でも止めようと思っただけでも言葉は出るんだから」

「僕もそうだったけれどね」

「あなたも？」

「実はね。そうだったんだ」

彼もまた昔を懐かしむ顔になっていた。穏やかで優しくそれで感じながら浸っている顔であった。その顔で妻に対して述べるのであった。

「あの時。確かに告白するつもりだったよ」

「じゃあ同じじゃないじゃない」

「それが違うんだ」

彼もまた芭蕉を見ていた。見ているものは妻と同じものだ。考えていることもまた同じである。今は二人は同じになっていたのである。

「心の中はおどおどして。どう言えいいかわからなかったけれど」

「言葉が自然に出たのね」

「そうだったんだ。多分君と一緒にだね」

「そうよ、同じよ」

夫の言葉に頷いて答えた。

「その通りなのよ。言葉が自然に出て」

「どうしてだろうね」

「さあ。けれど」

紙子はずっと芭蕉を見ている。その芭蕉を見ながら夫に対して話すのだった。今は言葉と心が同じものになっている。それを自分でも感じながら。

「ひよっとしてね」

「ひよっとして？」

「それは何かが言わせてくれたのかも知れないわ」

目をこれまでよりもさらに細めさせ優しいものにさせたうえでの言葉であつた。

「何かがつて？」

「それはわからないわ」

芭蕉を見ながら語る。

「けれど。それで一緒になれたのよね」

「そうだね。それは本当だよね」

「ええ。それはね。本当ね」

青い空からは黄金色の太陽の光が差し込んでいる。その光が芭蕉にもかかり芭蕉もその下にある大地も照らして生氣を与えていた。それも二人には見えていた。

「そして私達みたいに」

「こうして告白して」

「結ばれるのね」

今も芭蕉の側には多くのカップルがいる。そうしてそこで告白しているのだった。あの時の二人と同じように。何かに導かれて幸せになる為に。芭蕉の下で。

芭蕉の下で

完

2
0
0
8
.
3
.
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459e/>

バス停で

2010年10月8日15時04分発行